

以上物等、紫檀地螺鈿、或蒔繪螺鈿、以金銀白鐵等爲置口筋等物、無定樣、只在意略耳、略○下

〔雅亮裝束抄〕一だいきやうのこと略○中
そんざのやすみ所とて、外記史のざのそばなど、びんぎの所一けんにみすかけまはして、かうら
いのた、み一帖をしきて、大臣のそんざのおりは、おほつぼををき、大納言のには、いたにあなを
ゑるなり、

〔類聚雜要抄三五節雜事〕理髮略○中 私管一口

〔源氏物語常夏二十六〕何かそはことくしく思給へてまじらひ侍らばこそ、ところせからめ、おほみ
おほつぼとりにも、つがうまつりなんと聞えたまへば、えねんじたまはで打わらひ給て、につか
はしからぬやくなり、略○下

〔源氏物語湖月抄常夏二十六〕河尿壺オホツボ花 大壺延喜齋院式 今案、小便筒の事也、細しと筒やうの事也、略○下

〔松屋筆記〕尿筒シツツ 清器シツツ 虎子オホツボ
尿筒を、シトツ、といへり、虎子をオホツボといへり、色葉字類抄九卷志部雜物門に、清器シノハ
コ、一本作シ 虎子、尿管、褻器已上 云々とあり、可考合、

〔木曾續膝栗毛三編下〕おせうエ、埒もないひよんだくれなことにしたわい、おやち、なんでじやい
な、おせうその吹筒の酒うつかりと呑よつたが、ア、胸がむかつく、彌次なせでござります、
おせうバテそれは公家衆の小便しよるとものじや、みなく、ヤアくくく、おせうそなた

い禁裏の御葬送などの節、堂上方がみなもたせらる、完筒くわんたうといふものは、それじやわいな、あな
たがたが急に手水にゆきたくならせられた時、それへなさる、ものじや、江戸でも青竹を火吹

竹ほどにきつて、大名衆のもたせらる、事がある、やはり江戸でも完筒といふて、小便なさる、
ものじやわいな、北八エ、そんなら此吹筒もとは公家衆の小便擔たさかへ、サア、大變く、略○下

完筒